

<http://ws.aaf.ac>

建築学生ワークショップ伊勢2018

architectural workshop ise

参加学生募集!

応募締切

5.31
Call for entry

あやう
ひま
だ
伊勢
2018
ワークショップ

Photo: 宮澤正明

心の故郷 — 伊勢

「皇位継承、平成最後の年に」

伊勢について

「神都」の異名を持つ伊勢は、神宮の鳥居前町として伊勢神宮と共に歩んできた街です。伊勢神宮は、神社本庁の本宗神社。創祀から 2000 年と伝えられ、古代より神々に祈りを捧げ、豊かな国土に恵まれた自然の力と、神宮の歴史の中で培われてきた人々の力を感じる聖地。神宮では 20 年に一度社殿を建て替え神座を移す「神宮式年遷宮」が催行され、街に活気をもたらすことから「伊勢の町は遷宮のたびに新しくなる」ともいわれています。

地理

伊勢は、志摩半島の北東部に位置し、伊勢湾に面しています。南部は標高 100m - 500m の丘陵・山地が広がり、中心市街地は伊勢神宮 外宮（豊受大神宮）の周辺に形成されています。市街地を外れた森の中に、伊勢神宮 内宮（皇大神宮）が位置し、皇室の御祖先の神である天照大御神がお祀りされていることから、日本人の総氏神のように親しまれている神社です。「伊勢市」と称する以前は「宇治山田市」と称され、現在の、外宮周辺が「山田」、内宮周辺が「宇治」にあたります。

歴史・特性

宇治山田として称されていた伊勢は、伊勢神宮の門前町として古代から発展してきました。江戸時代には、江戸幕府が伊勢神宮の管理を目的とする山田奉行所（大岡越前として知られる大岡忠相が奉行を務めた）を設置され、「お伊勢まいり」の街として民衆に親しまれてきました。また、天皇・皇室のための神社としても位置し、「皇紀 2600 年」にあたる 1940 年（昭和 15 年）には、約 800 万人が参宮のために当地を訪れ、現在も、日本国内はもとより世界各国より多くの方が訪れています。古代より現代にも受け継がれてきた、わが国を代表する聖地において、天皇陛下生前退位をされる平成 30 年夏、伊勢にて建築学生ワークショップを開催します。

学び・開催

場所のもつ歴史や意味、地形や風の流れ、風土といった文脈を読むことを始点として建築はつくられていきます。つまり建築という行為の原点には、「場」を読み解く力こそが始まりであり、最も重要なことだといえます。これを国内でも稀にみる森林空間と古来の伝統的建築様式を今に伝える聖地・伊勢の神宮で学ぶことは、建築の道を歩み始めた次の日本を担う学生にとっては大切なことであり、これから建築をつくる揺るぎない基軸ともなっていくことでしょう。



御白石持行事



宇治橋



皇大神宮



内宮手水舎



神楽祭



宇治橋（伊勢神宮・内宮）

音羽悟（神宮司廳広報室広報課課長 神宮主事）× 須崎充博（伊勢市産業観光部観光担当 理事）

× 腰原幹雄（構造家 | 東京大学生産技術研究所教授）× 佐藤淳（構造家 | 東京大学准教授）× 平沼孝啓（建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰）



座談会の様子（伊勢神宮・神宮司廳にて）

——— 全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、毎年、開催地を変えながら開催していきます。歴史の特性をはっきりと持つ場所で開催することにより、建築や芸術、デザインを学ぶ若い世代が、後世にも続く遺産とされる場所でしか体験できない貴重な経験を通じて、場所のコンテキストからの建築の解き方を深めていくきっかけをつくっていきたくと思っています。そして 2018 年、古代より現代に受け継がれてきた、日本を代表する神聖な場所、神宮周辺区域にて、小さな建築空間を実現する建築学生ワークショップを開催します。神宮は、日本人の総氏神のような存在として崇敬される天照大御神をお祀りしている神社。古代より現代も多くの人々がお参りに訪れる「こころの故郷」でもあります。20 年に一度の式年遷宮や建築をつくり変え技術を継承することからでも、この場所の特性を用いるため、大きく分けて「歴史」「場所性（地形）」「現代の問題」の観点から提案を求めるものを探っていくながら、ワークショップ開催の意義についてお伺いしたいと思います。

本日は、開催に際して多大なご尽力をくださいます、神宮司廳の音羽様、伊勢市の須崎様、そしてこの建築ワークショップを初年度から見守り続けてくださる、東京大学の腰原先生、佐藤先生、そしてオーガナイザーの役割を担い続けてくださいます、建築家の平沼先生にお話しをお聞きしながら、伊勢でのワークショップ開催についてお聞きします。

平沼：はじまりのご質問をする前に、伊勢は、神宮の鳥居前町として伊勢神宮と共に歩んできた街だとお聞きします。そして神宮は、日本人の総氏神のような存在として崇敬される天照大御神をお祀りしている神社として、古代より多くの人々がお参りに訪れる「こころの故郷」と仰がれています。また近年は、御遷宮そし

て伊勢志摩サミット開催を機に世界中から注目されています。

まずは、この地が現代にまで続く聖地のような場所となり、現代にまでもたらした思想の背景と、この地に暮らす人たちの生活背景はどのようなものでしょうか。

音羽：神宮は 20 年に一度、式年遷宮を行います。古くは神都と称されていた伊勢の町衆を神領民という呼び方をしていましたが、伊勢市を中心とした町の方々も参加する大祭です。神職以外に、それぞれ住まわれている伊勢周辺地区にある 77 の奉仕団体が、遷宮のために 2 年間の御木曳行事を開催します。そして遷宮の年には御白石持ち行事もありこの 2 回の奉仕をしています。元々、律令の役人が直接造宮の担当をしていた時代には、国の機関で全て着手していたのが、やがて地元でもこういう奉仕をしたくなってこのような奉仕形態になっています。現在までにわかっている限りでは 15 世紀、1400 年代くらいから約 600 年間は、こういう行事が町と共に続いています。神宮を中心とし、この地で生活する年寄衆を中心とした人々が自治権を持ち、幕府の支配が及ばない、治外法権を持った街として独自の文化をつくってきたのが、神都と言われる伊勢の街の特色になります。

須崎：特に建築と密接な関係のある御木曳行事は、式年遷宮に使われる伊勢神宮の木を市民が奉納する行事で、御用材をお清めして届けるという作業です。伊勢の民達が一所懸命に奉仕する。戦前までは、国の仕事を神領民である伊勢市民がやることで、一年間、免税されていた地域である特色もありました。

佐藤：御木曳行事というのは、まさに山から木材を調達し、陸や川から木を運んでくる行事でしょうか。

音羽：はい。陸曳と川曳があり、内宮領では木を轎に載せて川曳

で行います。神宮の宇治橋のところからグッと曳き入れます。だから神宮に運ぶ時には、山から伐り出し、川下しするのを逆流するのですね。

須崎：外宮では、宮川堤防から引き揚げ、水切り儀式をします。そこから御木曳車に乗せて、外宮まで引き入れる。遷宮をお祝いする行事として、時期を決めて2年間にわたります。

音羽：20年間でこの行事が2回ありますから、皆さんが忘れそうになった頃に、またこの行事が入りますので、伊勢の街は神宮のお祭りで結構忙しい。しかも77も団体がありますと、それぞれでやっていけないといけませんね。

須崎：20年に一度。伊勢はこれで一挙に盛り上がり、何故かおもてなしをする力が出て来るというのは不思議な町ですね。結局、木を奉納してから7年間で神宮は、社を建てます。上棟式が始まり、建ち上がったところへ今度は御敷地へ敷く石を、宮川に私達がみんな手作業で拾いに行って、市民一人が一個奉納する。これが御白石持。遷御が行われる直前に開催します。

腰原：今回、機会をいただき参加をさせていただきましたが、大変楽しかったです。

音羽：伊勢は木と石の文化ですものね。

腰原：そのことを実感しました。日本の木は元々、信仰対象。伊勢の場合も木は、信仰対象ではないですか。

音羽：信仰の対象です。木を切る時には、元と末を回避します。真ん中だけをいただく。それを伊勢では「中の間」と言います。

腰原：回避するというのは？

音羽：伐った伐り株のところに枝を差す。これを鳥総立ての神事と言います。

腰原：なるほど。やはり建物の原点なのですね。身近にある木と石という自然の材料をいただいて、それを建物の形にする。自然から「わけていただく」という方法で辿っているのですね。



音羽悟
(神宮司廳広報室広報課課長 神宮主事)



須崎充博
(伊勢市産業観光部観光担当理事)



佐藤先生と腰原先生

平沼：式年遷宮は宮地をあらため、古例に倣いながら、建築を中心としたご社殿を建て替えることが中心となりますが、この大工道具もさることながら、神様の調度品となる神宝や、金銅飾金物等の装飾類等も含めて、全てを新調するとお聞きしました。これには、どれくらい多くの職人の方々が関わられていますか。

音羽：ええ、わかるだけでも神様の調度品を作っている御装束神宝の調達に携わる人だけで3千人ほどです。殿舎などをつくり替える方たち全てを合わせると2万人から2万5千人くらいの関係者がおられます。

佐藤：すごい数ですね。そして必ずしも建築と関連しない分野もあると思いますが、そこに日本屈指の職人技が集結していると思うんですね。さらに次の遷宮を見据えて始めておられますか。

音羽：後継者という意味ではあると思います。

平沼：そして今回の式年遷宮では、新旧両様の、建築の状態をみることができました。比較することで遷宮がわかり易く伝わり、苔などの作用や自然素材の特長、そして通気をもたらすような隙間を開けた工法から、それが自重と共に朽ちていく歳月を感じることができました。これは毎回、お見せしていないのですか。

音羽：そうですね。前回の式年遷宮では見せていませんでした。棟持柱を軸に、鰹木だけでも一本450kgあり、これが10本乗っています。屋根だけでも相当な重量になるために、棟持柱が棟木を支えるのに、隙間が存在します。20年の時間の経過からこの隙間が埋まるように、どんどん下がってくる。実際の構造としては壁で支えているだとか、いろんな説がありますが、一度評価をいただきたいです。

腰原：出来たときの隙間は、いろいろ伝説が多すぎますね。(笑) 科学的には中々、解読しきれてないですね。

佐藤：最初に接触しているところは分かっているのですか。

腰原：そう。だけど、最終的に接触しているところは変わるのです。つまり木が、だんだんと縮んできて「効く」場所が変わってくるのですが、設計時にはどちらを期待していたのでしょうか。

通常の建築だと、「隙間が空かないように工夫しましょう」と考えるのだろうけど、神宮のご社殿の場合、構造の仕組み自体が他とは違いますね。

音羽：そうなんです。壁はピタッとくっついていますが、壁と軸組みの隙間で通気を取るということを聞いたことがあります。でも実は、この壁自体が屋根を支えている重量を分散し緩和する役割もあります。

腰原：自然素材を通して何を伝えたいのか。近現代の工業製品はモノに価値を与えてきましたが、神宮では技術と共に神聖な空気を引き継ぐ。モノではない精神性を引継ぐには、20年ごとにつくり替えることによって、何を伝承し、残していくということに価値をおいているのでしょうか。この部分をとても知りたいです。たとえばモノとしては同じような話題になりますが錦帯橋も、2～30年ごとに修理を含めて架け替えをしています。世界的に語られると、あれは単なる新橋の掛け直しだと言われる。だけど神宮と同じように、錦帯橋の架け替えをする人々は、ずっと同じものを架け続けているんだという、日本的な価値観が存在します。

音羽：そうですね。繰り返すことを「技術の継承」や「伝統」そして「文化」と言われますが、私は「誇り」だと思います。こういうことを伝えていくんだということが、日本人として、自分たちが最も大切に感じています。

須崎：この「誇り」。そしてこれをつくる人たちは、私がついていますって決して言わないのが伊勢です。特にご神宝をつくる方たちは、私がつくったと自慢もしないし、神宮へ納められていることに、誇りを持たれています。あまり知られていませんが、棟持柱が遷宮でお役目を終えた後、鳥居に使われています。現代ではリユースと言われますが、式年遷宮で役割を終えた全ての材は、ほとんどリサイクルしているということをお聞きされていないことです。

平沼：遷宮が終わると日本各地の神社へ材を分けられ、日本古来から続く素晴らしい循環システム。現代だとこのシステムは管理する側の都合で構法をつくられたりすることが多いのですが、外宮側と内宮側では、つくり方やそもそもの構法がまったく違うのですよね。



佐藤淳
(構造家 | 東京大学 准教授)



腰原幹雄
(構造家 | 東京大学生産技術研究所 教授)



須崎理事と音羽神宮主事

音羽：そう、まったく違います。そして大工もまったく違うんです。まず外宮は3班しかなくて、内宮は4班あったということ。一班につき頭、頭代、工老2名、小工7名の11人編成でした。つまり外宮の方が極端な話、11人少ない。そのため折置組で建てたので合理的なつくり方をしている。この轆轤で引っ張りながら、妻側の部分を壁も組み立てておいて、よいしょと引っ張って建てる。内宮は平入りとなる前は、柱間の距離が長くてしかも重くてそれが出来ないわけで、妻の壁板のはめ方も違ったんです。外宮は小屋組みを全部して、後からぼんっと半柱形式の板をはめたんですけど、内宮はこの桝に全部合わせて、入れていくやり方で今回は伝統的な京呂組です。外宮と内宮ではまったく構法が違います。

佐藤：そうなんです。細かな刻み方だとか建てていく手順などもすべてが違うのですね。これは、口で伝えられてきたのですか。

音羽：はい。口だけで。

佐藤：それは素晴らしいですね。もう信じられない…。(笑)

音羽：神宝の図面も残っていなかったくらいですからね。

平沼：伊勢に通いはじめて感じるのですが、やはり外宮は街と共にあり、内宮は神宮の森や山と共にある。この感覚からひとつお聞きしたいのは、外宮で使われる素材も、神宮の森から出された同じ素材が使われていますよね。僕はあの神秘的な森や山に相当な興味を持ちはじめます。神宮として相当な管理をされていますか。

音羽：そうですね、管理してます。現在の山は、約5500haあり大正時代からはじまった管理形態になります。ちょうど東京の世田谷区と同じ面積で、伊勢市の1/4程度が神宮の領域です。江戸時代のお蔭参りで、ほとんどを切り尽くし、明治時代になってからまた植えだしているんです。100年後には全てをこの森から出せるようになるんですけどね。あと100年は木曾に頼ります。

腰原：先ほどの技術の話に戻りますが、本当はずっと同じ技術で造っているわけじゃないですか。知恵を足したり、変化をさせたり。進歩していく構法をどこまで許容しているんですか。そして時代

と共に変化もしていくんですか。

音羽：時代とともに変化しています。

腰原：変化するものだという意識はありますか。

音羽：あります。例えば、縦引きの鋸がない時代や、鉋がない時代が当然あるわけですから、中世は、どういう風にして壁板をはめていたんだろうとか、恐らく槍鉋で削っていたんでしょう。ただ古い記録を見ると、基本的な構造は変わっていないのですが、技術の進歩で仕上がりの質は高まっていると思います。

佐藤：展示館（せんぐう館）ができ、最も感動したのは、単なる相欠ぎの合わせ材の角々が全て面取りしてあり、ぴたっと合うような工夫が施されている。材の継ぎ手の隙間から光が入らない仕組みでしょうが、単なる相欠ぎでこのような刻み方を見たことないと思いました。

音羽：近世、近代で大工の技術も進歩していると思います。

腰原：やっぱり進歩した技術を少しずつ入れていくわけですね。それをまた自慢しないから、今みたいに。(笑)

佐藤：そうそう。あのせんぐう館ができたから分かりましたけれども、相当な工夫で培われた技法やディテールを学びたいくなります。(笑)

平沼：最後にお聞かせください。全国からこの地に建築を中心とした学生たちが集まり、いろんな問題を提起し、歴史のコンテクストを読み解きながら建築空間を表現するのですが、どんなことを提案するといいでしょうか。

音羽：伊勢は、やはり森ですね。森の中にお社やお宮があり、なんと言っても千木経木があって萱葺の屋根であるということが大きな特徴になっています。あと、白木で造っているということ。そして木と石の文化ですから、白石というのも、一つの特徴になります。あと神領民ですね。神領民の心意気で伊勢は、神都と言われてきた町であるというようなことも大切です。

腰原：次の遷宮予定地に小さいお社があると思うのですが、何の



皇大神宮石階下



座談会の様子

シンボルなのかなと、ずっと思っていたんです。

音羽：あれは心御柱、大御神木様の御神体を泰安するところです。誰も見られないように、鍵が掛かっているんです。神様の御神体のある部分と、心御柱が置かれる場所です。

平沼：それも一緒に宮大工の方たちが造られる。

音羽：心御柱は象徴的な柱なので、あれを据えるのは神職なんですよ。

腰原：なるほど。シンボリックになり過ぎるのを、このワークショップで説明するべきなのか、それとは別に、自然素材で時間の流れを語る。つまり「メッセージを発する建築」がいいのか、「祈りを捧げる建築」とした空間ですかね。

音羽：伊勢に沿えばどちらでもいいと思います。

全員：わはは。(笑)

佐藤：これまでのワークショップから学生たちの提案を見てきて、神聖な場の雰囲気によってコンセプトに悩みすぎる。もっと植物的にやれば良いのって思うのです。この最も神聖な伊勢でも、具体的にどんな材料が入手でき、多くの参拝者もいる訳ですから、神宮周辺でつくる意義をしっかりと工夫したりリアルな構法で表現してもらいたいと思っています。

(平成 29 年 11 月 23 日 伊勢神宮・神宮司廳にて)

——— たいへん貴重なお話しが聞けて、本日はどうもありがとうございました。この座談会を通じて、このワークショップが参加学生にとって、とても貴重で意義深いものになるような気がしています。そして将来、この場所で開催した意義につなぐように、提案者を募りたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

聞き手：樋口瑞希 (AAF | 建築学生ワークショップ運営責任者)

Architectural Workshop

Ise 2018

開催場所 伊勢・神宮周辺区域（三重県）

神宮は、三重県伊勢市にある神社本庁の本宗神社。古代より現代にも受け継がれてきた、わが国を代表する聖地。



現地滞在スケジュール

6月23日(土)
現地説明会・調査(日帰り)

7月28日(土) - 7月29日(日)
提案作品講評会(1泊2日)

8月28日(火) - 9月3日(月)
合宿にて原寸制作(6泊7日)

9月2日(日)
公開プレゼンテーション

開催期間 2018年8月28日(火) - 9月3日(月) 6泊7日

※合宿にて原寸制作
※9月2日(日) 現地にて公開プレゼンテーション

参加費用 実費 (宿泊費、保険代、図録・資料費、一部食費等 ¥35,000 事前徴収)

※現地までの交通費は各自別途負担となります。
※開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

参加申込

ウェブサイトからお申込みください

<http://ws.aaf.ac>

※参加者募集期間 2018年1月1日(月)~5月31日(木) 23:59(必着)
※参加対象者 建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生
【参加学生】定員:60名程度(大学院生8名+参加部生42名+運営サポーター10名) 8グループを予定
ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。
原則として、先着順の応募を優先しますのでお早めに応募ください。
【運営サポーター】定員:5~10名程度(参加・宿泊費無料 開催期間中)
開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。(学部は問いません)
※交通費 各自別途負担

参加予定講評者

日本の文化を世界へ率いる方々や、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、コミュニティデザイナー、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにご参加いただきます。

五十嵐太郎 (建築家・建築評論家 東北大学 教授)	陶器 浩一 (構造家 滋賀県立大学 教授)
太田 伸之 (クールジャパン機構 CEO)	芦澤 竜一 (建築家 滋賀県立大学 教授)
栗生 明 (建築家 千葉大学 名誉教授)	遠藤 秀平 (建築家 神戸大学 教授)
建畠 哲 (美術評論家 多摩美術大学 学長)	竹原 義二 (建築家 摂南大学 教授)
南條 史生 (美術評論家 森美術館 館長)	長田 直之 (建築家 奈良女子大学 准教授)
山崎 亮 (コミュニティデザイナー 東北芸術工科大学 教授)	平田 晃久 (建築家 京都大学 准教授)
稲山 正弘 (構造家 東京大学 教授)	平沼 孝啓 (建築家 平沼孝啓建築研究所 主宰)
腰原 幹雄 (構造家 東京大学 教授)	本多 友常 (建築家 摂南大学 教授)
櫻井 正幸 (旭ビルウォール 代表取締役社長)	横山 俊祐 (建築家 大阪市立大学 教授)
佐藤 淳 (構造家 東京大学 准教授)	吉村 靖孝 (建築家 明治大学 特任教授)

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普段の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“今、建築の、原初の聖地から” 伝えたいことを、空間として表現してください。

御遷宮して伊勢志摩サミット開催を機に世界中から注目されている伊勢の地に、日本全国で建築を中心としたものづくりを学ぶ大学生が集まり、長い歴史に受け継がれてきた技術と精神を未来へとつなげていくために、「今、建築の、原初の、聖地から」伝えていくべきことをそれぞれが真剣に考え、原寸大の空間として表現します。神宮を中心とする周辺区域において、大学生たちの作品を展示することで、訪れた人が中に入り、心を落ち着かせ、歴史と対話することができるような、小さな建築空間を1日だけ創出します。将来を担う学生たちが今という時代に向き合い、この場所でできることに全力で取り組む。「こころの故郷、伊勢」で、共に学んだメッセージを発信していきます。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、未来を創造する提案をしてくれることでしょう。

【スケジュール】

5月10日(木) 参加説明会開催(東京大学) 腰原幹雄
5月17日(木) 参加説明会開催(京都大学) 山崎亮
5月31日(木) 23:59必着 参加者募集締切(参加者決定)
6月23日(土) 現地説明会・調査
7月28日(土)~29日(日) 提案作品講評会と実施制作打合せ
28日(土) 提案作品講評会
29日(日) 実施制作打合せ
7月30日(月)~8月27日(月) 各班・提案作品の制作
8月28日(火)~9月3日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル
28日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り
29日(水)~9月1日(土) 原寸模型制作(4日間)
9月2日(日) 公開プレゼンテーション
3日(月) 撤去・清掃・解散



宇治橋(伊勢神宮・内宮)



神宮司廳(伊勢神宮・内宮)

【制作内容】

“唯一無二の歴史的風土を守るために、あなたの提案を実現化してください”
原寸模型を地域産材(自然素材 / 木材、和紙、土、石など)の材料で制作

Architectural Workshop

Ise 2018

開催記念 説明会 講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」を、今年は 8/28 (火) - 9/3 (月) に伊勢・神宮周辺区域にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍中の建築家が自身の学生時代の体験を通して、現在の作品にどう影響しているのかをレクチャーしていただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

東京会場

東京大学 (弥生キャンパス)

農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩 3 分

東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩 10 分

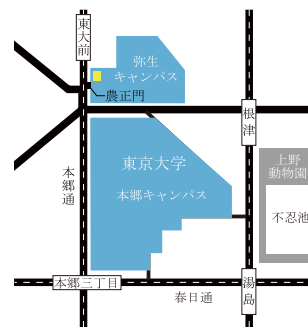
5月10日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員：先着 100 名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **腰原幹雄** (構造家)

1968年千葉県生まれ。2001年東京大学大学院博士課程修了。博士(工学)。構造設計集団<SDG>を経て、12年より現職。構造的視点から自然素材の可能性を追求している。土木学会デザイン賞最優秀賞、日本建築学会賞(業績)、都市住宅学会業績賞など多数の賞を受賞している。主な著書に「日本木造遺産」(世界文化社)、「都市木造のヴィジョンと技術」(オーム社)、「感覚と電卓でつくる現代木造住宅ガイド」(彰国社)などがある。



京都会場

京都大学 (吉田キャンパス)

百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩 10 分

京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩 10 分

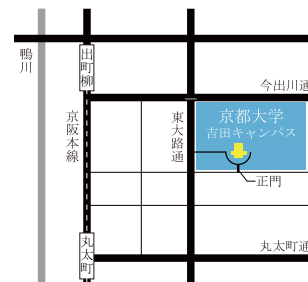
5月17日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員：先着 100 名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **山崎亮** (コミュニティデザイナー)

1973年愛知県生まれ。大阪府立大学大学院および東京大学大学院修了。博士(工学)。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年に studio-L を設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。著書に『ふるさとを元気にする仕事(ちくまプリマー新書)』、『コミュニティデザインの源流(太田出版)』、『縮充する日本(PHP新書)』、『地域こはん日記(パイインターナショナル)』などがある。



2010 奈良・平城宮跡



2011 滋賀・竹生島



2015 和歌山・高野山



2016 奈良・明日香村



2017 滋賀・比叡山

主催

© **AAF** 知性あふれるレクリエーションを。 Art & Architect Festa
NPO/AAF Art&Architect Festa 特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ ウェブ www.aaf.ac Eメール info@AAF

神宮司廳

伊勢市

特別協賛

旭ビルウォール株式会社 **AGB**